

**無意識との対話**  
**TAT 物語を『舞台』として**

立命館大学応用人間科学研究科  
臨床心理学領域

症状はある人にとっては、自分となじまないもの、不調和を起こす「異物」として立ち現れてくる。Freud, Sは『精神分析入門』の第十七講（症状の意味）において、「神経症の諸症状には、錯誤行為と同じように意味があり、神経症の症状を示している当人の生活と関連があるのです」と述べ、「症状」に対して、その背後に隠された意味があることを明確に宣言した。被治療者の生活と関連づけ、当人の志向性を基底においてその意味を理解しようとする時、症状は被治療者にとってさまざまな意味を持つことになる。そのなかで、症状は否定的側面だけでなく、被治療者の成長のために必要なものとして現れ、ポジティブなものとして「感謝」の対象にもなることもある。Jung (1964)は、神経症について「いかにして神経症を片づけることができるかに努めるべきではなく、神経症が何を思い、何を教えてくれるのか、その意味と目的は何であるのかを知るように努力を払うべきであろう」と述べている。このように、症状が持つ意味のポジティブな側面を考えていくとき、症状とは、意識と無意識、身体と無意識で何らかの力が作用しあっており、それを伝えるための無意識からのメッセージであると考えられる。

無意識からのメッセージに受け取るわれわれが、自身の無意識に近づく方法はいくつか考えられる。そのなかのアクティブ・イマジネーションにおいて、無意識とのかかわりについて触れた。無意識は、普段は意識されていないため、自我にとっては異質な他者である。しかし、異質であるからこそ、自我にはない力を秘めていると考えられる。そして、イマジネーション、すなわち想像こそが、そうした力にアクセスするもっとも確実な方法だとする。老松 (2004)は、イメージに対する関わり方の「コツ」について、「コツのひとつに、無意識とのやりとりを折衝と見なすということがある。」と述べ、さらに老松 (2004)はアクティブ・イマジネーションの流れについて「イメージにはもともと自律性があるので、自我が邪魔さえしなければ、無意識自身の意志によって勝手に動く。つまり、何かのイメージがふと浮かび上がってくるわけだ。これは無意識からのメッセージである。それに対して自我がある行動をすれば(もちろんイメージの世界で)、そこには自我の意見が反映されることになる。それから、再び無意識に自由に動いてもらう。つまり、次の場面が思い浮かぶにまかせるのだが、これは先の「自我の意見」に対する無意識からの主張となっている。そこで次には自我が・・・というふうに、いわばイメージのキャッチボールを行ない、一つの物語の形にしていく」と説明している。

また、未知なる無意識と向きあうことは様々な困難を強いられる作業である。そのような無意識との「折衝」において、意識が受け入れがたい無意識の動きに対してどのように

接するかは重要な問題である。Jung (1944) は『心理学と錬金術』のなかで、「無意識の仮面は硬直したものではなく、われわれが無意識に向ける顔を反映するのである。敵意はその仮面を脅かすような様相にするし、好意は仮面を柔和にする。しかしそれは単に見たままを映し出すのではなく、映し出す側の特質を十分に提示する自律的な応答なのである」としている。

材料として、無意識との対話における「舞台」として投映法である TAT を用いた。Piotrowski (1952) は、TAT の物語のどの登場人物も被検者のパーソナリティのある面を表現しているという見解をとっている。本研究では、TAT 物語の人物と対話をするのが無意識との対話につながると考え、その対話の過程を見ることにより、無意識との対話が被検者に与える影響を検討・考察することを目的とした。方法として、TAT を施行した後、その TAT 物語のなかの登場人物との「筆記対話法」をすることを被検者に求めた。「筆記対話法」は、アクティブ・イマジネーションの理論を参考にしている。その方法は、作成した対話用紙の上で、被検者が「自分自身」と「対話相手」のそれぞれの言葉、反応を交互に想像し、記入することによって対話するというものであった。両者の関係の変化をより詳細に検討するために、対話の前後にイメージ描画も施行した。最後にインタビューを行なった。これらの過程を 2 枚の TAT 図版について、健常者 X、Y、Z の 3 名の被検者に行なった。得られた結果は、被検者ごとに各図版それぞれについて TAT 物語、対話を検討・考察した。それぞれの対話とインタビューにおいて、被検者と無意識の「折衝」の過程がみられた。X 氏による図版 1 の対話では、共感的に接することによって無意識との関係が近づいたことが、インタビューとイメージ描画において読みとれた。そしてその対話を X 氏は「満足」と語り、「ポカポカしてる感じ」という身体感覚の変化も語った。山森 (2003) は、心身症を「心的状態の在りようが、当人の意図を超えていつのまにか身体的回路を通して表現されている」と述べた。X 氏の体験は、病的なものではなく、対話による心的状態のポジティブな変化が、身体感覚として表現されたものだと考えられる。Y 氏は無意識との対話で相手を励ますことによって、自分自身にも活力が与えられる感覚を持ったことをインタビューで語った。Z 氏は、TAT 物語の登場人物の悩みと自らのテーマを重ね、自分自身のことについて振り返るといった体験をした。

本研究において、意識と無意識との「折衝」の過程について検討した。その対話の結果を、意識がどのように受けとめていくかについては今後さらに研究していきたい。